



**Data**

監督: ヨアキム・トリアー

出演: エイリ・ハーバー/カヤ・ウ  
 イルキンス/ヘンリック・ラフ  
 フェルソン/エレン・ドリ  
 ト・ピーターセン

---



---



---



---



---



---

### ■■■ショートコメント■■■

◆『ダンサー・イン・ザ・ダーク』(00年)は第53回カンヌ国際映画祭でパルムドール賞に輝いたラース・フォン・トリアー監督の代表作だが、本作のヨアキム・トリアー監督はそのラース・フォン・トリアー監督と叔父、甥の関係にあるらしい。そして、チラシによれば本作は「ラース・フォン・トリアーの遺伝子を受け継ぐ鬼才が放つ北欧ホラー」らしい。そして、チラシには「世界が固唾を呑んだ衝撃作」「最高にスタイリッシュな傑作ホラーの誕生!」「刺激的で衝撃的そしてこの上なく美しい」等の文句が躍っているから、本作は必見!

◆本作の冒頭シーンは、ノルウェーの雪深い森にまだ幼い娘のテルマを連れて狩りにやってくる父親トロン(ヘンリック・ラファエルソン)が一頭の鹿を発見するシーン。これによってトロンの銃は鹿に向けられたが、その後、なぜかその銃口がテルマの頭に向けられることに。ええ、こりゃ一体ナニ・・・?

◆それから数年後、美しく成長したテルマ(エイリ・ハーバー)がオスロの大学に入るため一人暮らしを始めるシークエンスが描かれるが、そんな青春時代の楽しい展開は万国共通。真面目に授業に通っていたテルマだったが、ある日、教室の中で突然てんかんのような発作に襲われたから大変。さらに、その原因が容易にわからないからますます大変だが、テルマを助けてくれた友人のアンニヤ(カヤ・ウィルキンス)と仲良くなり、友人関係が広がり始めたから、このまま順調にいけば・・・。

◆本作では、テルマがてんかんの治療を受けていく中で、父親トロンの職業が医師であることがわかる。さらに、ずっと以前に死んだと聞かされていたトロンの母親、つまりテルマの祖母が生きたまま精神病院に収容されていることがわかったり、なぜかテルマには小さい頃の記憶がないことがわかってくると、次第に本作はホラー色が濃くなっていく。そ

して、封印されていたテルマの“恐ろしい力”の実態が少しずつスクリーン上で示されてくると……。もっとも、それを見せられると「そんなバカな……」と思う面も。さあ、そんな「世界が固唾を呑んだ衝撃作」の、中盤以降の展開は……？

◆『中国の植物学者の娘たち』(05年) (『シネマ17』442頁) も、『アデル、ブルーは熱い色』(13年) (『シネマ32』96頁) も、若い女性同士の“同性愛”をテーマにしたものすごい映画だった。それと同じように本作も、テルマとアンニャの同性愛のシーンが描かれるが、それがほんのちょっとだけなのは残念……。

他方、テルマの父親は教育熱心な上、しつけや宗教の面でも厳しいことがストーリー全体を通じてよくわかるが、それは娘の成長にいかなる影響を？ひょっとして、それらが複合的な原因となってテルマの心因性てんかんの原因になったのでは？さらに、彼女が持っているという“恐ろしい力”の原因もひょっとしてそこらあたりに……？

そう考えながら観ていると、スクリーン上では次々と恐ろしいシークエンスが展開されていくので、それに注目！なるほど、これが「ラース・フォン・トリアーの遺伝子を受け継ぐ鬼才が放つ北政ホラー」なのか……。

2018(平成30)年10月30日記